

平成 23 年 3 月 16 日

新潟青陵学会会長殿

平成 22 年度新潟青陵学会共同研究 報告書

1. 研究課題名

心の健康問題を持つ子どもの養護診断・対応におけるわぎの研究

2. 研究組織

代表者: 新潟青陵大学 看護 学科 職名: 教授 氏名: 石崎トモイ 
 分担者:

| 所 属 | 職 名 | 氏 名 |
|---------------|------|------------|
| 新潟青陵大学 | 教授 | 石崎トモイ・中村恵子 |
| 新潟県教育庁下越教育事務所 | 指導主事 | 栗林祐子 |
| 松浜中学校 | 養護教諭 | 大森悦子 |
| 新潟青陵大学 | 助教 | 伊豆麻子 |
| 新潟大学大学院保健学研究科 | 教授 | 西山悦子 |

3. 研究期間 平成 22 年4月1日 ~ 平成 23 年3月31日

4. 研究成果の概要(当該研究期間のまとめ)

子どもの健康問題は複雑化・多様化している。本研究は、経験10年以上の養護教諭4人を対象に子どもの心の健康問題への支援(関わりや対応)に関する面接調査で、養護教諭がどのように子どものサインを受けとめ、どのような「わぎ」を駆使して養護診断・対応を行っていたかを明らかにすることを目的とした。研究デザインは、半構造化面接を用いた質的研究である。

結果は逐語録から、分析ワークシートを用いて行い、87の「概念」と15の【カテゴリー】を抽出できた。養護教諭は、子どもが保健室に来室した時、「事前に得られた子どもの情報を自分の目で確かめて捉える」等【子どもの状況から問題を予測して情報を集める】ことをしている。また「居場所の確保をする」や「誰もいなくなった時に話しかける」など【子どもが自分のことを安心して出せる環境を作る】ことに励んでいた。それに「危険性がある時は目を離さないで、声掛けをして確認する」「主治医に緊急時における対応を依頼する」など【生命の安全を守る】ことを徹底し、時には「精神科医からコンサルテーションを受ける」等【支援の発想転換をする】対応がされていた。連携は【外部との連携をする】、「校長のリーダーシップで校内体制作りを仕組む」など【校内での連携をする】ことを行い、「保護者をその気にさせる」「保護者を中心にして情報交換を行う」などの【保護者との連携をする】の3方向から行っていた。「何かあったときに話しかけられる存在となる」など【学校という組織における役割を果たす】養護教諭の姿が確認できた。

考察、養護教諭は、経験知に基づいて直感を働かせ、早い段階で問題を予測し、幅広く確実な情報収集を行っていた。さらに子ども自身が心の健康問題を乗り越えられるように働きかけていた。そして学校組織の一員であることを常に意識し、学校という組織における役割を果たすことを心がけていた。また立場によるズレを認識した上で行動し、時には支援の発想転換をしていたことが明らかになった。

5. 交付決定額(配分額) 400,000 円 使用額 400,000 円

6. 研究発表

| 区分 | 学会誌名・学会名等 | 発表者 | 論文名・演題名等 | 年 | 月 |
|-----|---------------------|--------------|---|-----|-----|
| 発表済 | 第57回日本学校保健学会 | 中村恵子(代理佐藤美幸) | 心の問題を待つ子どものサインとその養護診断・対応プロセスに関する研究(事例3) | 22年 | 11月 |
| 発表済 | 第39回新潟県学校保健学会 | 栗林祐子 | 心の問題を待つ子どものサインとその養護診断・対応プロセスに関する研究(事例4) | 22年 | 12月 |
| 発表済 | 第7回日本健康相談活動学会「学術集会」 | 石崎トモイ | 心の健康問題を持つ子どもの養護診断・対応におけるわぎの研究 | 23年 | 2月 |

7 添付書類 6 枚

※ 研究成果を発表した雑誌等の目次、研究発表会等のプログラムのコピーを添付のこと。